

## 日米首脳会談やFRB要人発言など、政治・経済関係の発言に注目

2019年9月23日(月)

今週は目立った経済指標発表予定や、先週複数見られた中銀金融政策発表などの予定がなく、要人発言などに警戒しながら、米中通商協議への思惑や、FOMC後の流れの確認などが主体の展開となりそうです。

今週は国連総会が本部のあるニューヨークで開催されるため世界各国の首脳が同地に集まる予定で、多くの首脳会談なども行われることから政治関連での発言はかなり多い週となります。

そうした中でも、特に注目したいのが25日に実施予定の日米首脳会談です。

先週クドローNEC(米国家経済会議)委員長は、日本との通商合意の締結に米政権は楽観的で、「国連での発表があるかもしれない」と、日米首脳会談で合意する可能性を示しました。国連総会に同行する茂木外相も米通商法第232条に基づいた日本車への追加関税の回避を盛り込む形で国連で合意文書に署名するもしくは共同声明に盛り込むなどの方針を示しており合意に向けた動きが期待されています。農産品については、TPP(環太平洋パートナーシップ協定)で示された水準まで日本の市場を開放することですでに大筋合意しており、大きなハードルはなさそうです。

相場への影響が出るのは、合意に至らなかった時でこの場合、リスク警戒感からのドル売り円買いが強まると見られます。一気に市場の雰囲気が変わっての円高進行となる可能性があります。

政治関連以外の発言では、先週のFOMCで内部での見通しがかなり割れていることが示されたFRB関係者発言が当面の注目材料です。

今週は23日にウィリアムズNY連銀総裁、ブラード・セントルイス連銀総裁

25日にエバンス・シカゴ連銀総裁、カプラン・ダラス連銀総裁

26日にカシュカリ・ミネアポリス連銀総裁、今週二回目のブラード総裁、同カプラン総裁の講演などが予定されています。

中でも注目はウィリアムズNY連銀総裁。

金融政策の実務を担当し、先週は大荒れの短期金融市場の対応で連日のレポ実施などを行っている同総裁。地区連銀の中では唯一常にFOMCでの投票権を持ち、FOMC副議長(FRB副議長とはまた別)も務める重要な役割を果たしている同総裁サンフランシスコ連銀総裁時代は比較的ハト派的(金融緩和派)的な姿勢も見られたウィリアムズNY連銀総裁ですがNY連銀総裁となつてからは比較的中立的なイメージです。FOMC後の各地区連銀の発言などで年内利下げについて、個人的には利下げを見込んでいたとばかり言い切ったメンバーから逆に利下げに反対すると言い切ったメンバーまでくっきりと意見が分かれているだけにウィリアムズNY連銀総裁の発言でどちらかの見通しがはっきりしてくると相場の流れが大きく変わる可能性があります。

米国以外で注目材料をみてみましょう。

ユーロ圏は24日の独Ifo景況感指数。

ECBが今月利下げとQE再開を軸にした大きな緩和に向かった背景には欧州経済の減速懸念があります。

ユーロ圏最大の経済大国で、他のユーロ加盟国を支えていくことが期待されるドイツですが先月発表された第2四半期GDPが前期比マイナスとなり、第3四半期のいまいぢ冴えない状況と併せリセッションの可能性が出てきているなど、ここに来て先行き不透明感が強い状況です。ドイツでもっとも注目される経済指標であるIfo景況感指数への注目も集まります。ここに来て5か月連続での悪化で、2012年11月以来、約7年ぶりの低水準を記録しました。今回の事前予想は94.5と、小幅ながら前回94.3から回復の見込み。予想に反して6か月連続での悪化を記録すると、ユーロ売りの動きがもう一段強まる可能性も。

ポンドは28日から英与党保守党の党大会が始まります。

離脱者が多く出ている状況などを含め、ジョンソン首相の対応が注目されます。

また、日付は決まっていますが、今週の比較的早い日に、

ジョンソン首相が決定した5週間にわたる議会閉会の合法性についての判決が英最高裁で下される見込みです。

ブレグジットがらみでの相場の反応は、10月31日の離脱合意期限の前に強まってくる可能性があります。

不透明感が強く、市場の反応が読みにくいですが、注意が必要です。